珍共二

慶安元年板

一言芳談抄

下

188.64
I737

国立国会図書館　タイトル『一言芳談抄 : 2巻』 請求記号 188.64-I737

ガラス使用

一言芳談抄巻之下

敬蓮社云。日来好世のこゝあるものを学問などし
つれ共。大旨ハ無為になるまゝあれなり
有云。解脱上人合ゆるの氣味見るをいとみてどく
のくらはれり水をいまたまひき
有云。云戒上人。法師に跨居しのふ或人。其所を問ふれ
ハ。三界六尾にハ。云尾をくしたりけしもへて。ゆはなさ
不考きゆへ也云々
松蔭顕性房云。婦りおそはまりあひたるにハ先

国立国会
25.3.31
図書館
111499

国立国会図書館　タイトル『一言芳談抄 : 2巻』 請求記号 188.64-I737
ガラス使用

つゝみはきそのほかに。別の名なし。どせ此愛河をわたらんとおもふに。浄土此名号乃実得つれよりハ佛法して稱名するほかにさ。別の様なき也。然さ
さゞしき。智恵なり。換ぎらほく事を。無実にはなりひ
し。私人ことになる也なり

又云。公此専不専を不論して。無量あみた仏となるゝ
ゑ。誰なり。詮要と。無実に思ふ人此なき也

又云。無実にけ男を仏にまゐせてまつれ。公をハ人ごと
なりたこさゞ。私也。後世此法とめに。賜をあしむりの也

一人也。如此又なり

又云。佛にすけもの人と思ふ。公法。第一此よきひまそあ
ことを。真實に思ひし。ほうを。人ごとになきなり

又云。公らるし。他帰望どもをなげしてゝ。ゑゞあり此
まゝなれ。公なりして。事に名号をとなへんと思ふつれと
きハ。たてまくなし。黒白を弁ざ。ほうなどの抱にありて
平に忘仏をむと。思へ。ほうを。無実なり。おこせれ
人をなきを。河源仏の如。他力此不思議の男
をば。いう程のらうゝ也。志りたる。人ごとに。

我作て罪悪の身をかへりみく。佛力法力をたりひ
法るなり。然ら罪業もいよくとゞ悔らざ道也
これハ返るもあしきなり。又死をいうぞ云ぞんを
後世の才一のゝ事すけまそあれなり
又云むしハ後世をかりかりのハ上臈ハ下臈になり。智
者ハ愚者になり。城人を貧人を成。能あるものハ無
能なりこそ嬉しがれ。此人ハこれをみるさがへり。我ハ無
高野にはじめも。中法を云さしくあるしかども。魔
字一をならいぬ。名利を捨るなりしはあれ能を

ぶるにもこそ捨られなるにふるはいたそしきまゝ也
我ハ三年餘年さ猶のすゝ志しじとなりしも。よく
まぐれバすてぬりの猶りてあれなり。名利を捨と
いへばとて閑行をたぢに紙衣ひとりもとあてさき
家ハ此事をいふまはあらずこまに我此名利無
後世をゝすゝ事なり
出見の毎代をのむ者ぞくさ成を志しぬ。ぬぐた
のりしきをあれ名号を法敬さんことかへ此ごとし
聖光上人云八万法門ハ死の一字をとく。我ぞ則死

を遣れざる也ハ万法門を日ゟ事ニ於ケルのよわ法也
有云 右寂殺房云 不易此時敬仏房 僕中云 ざい家
のもの所ニ居ぶさめなるに時ハ ざいに 俄式 作法を
なるべく 敬ども 海さしく 其日にあらりて をく
小射んとて ぢさと馬を出しつれ うへハ 相撲 対あ
てんと思ふ 所ハ 他ゟ事なきまま 定り 日ごろハ 後
世の事 ぞりくこれ ゑ 勿つれども いましすぞ ふ 病床
小のぞみ ゝり 他意なく 金紙して 性生 をむと
思ひ 死 給べしとけし也

中蓮 本云 本乗に 御しぬ 名号を 頃じて むよハ 念仏
お 遊此 敬文なれバとて 文に ひそひ ひとまを入れ
事ハ これ 遣 順麗にて あれ なり
敬仏房云 後世ゟ此法文ハ 紙一枚 ますぎぬなり
又云 後世ゟの法文ハ 第ハ あさくて ぞぎしがふ 法べき也
又云 或時 仏房に 尓云 世ゟ此 雅治 寿 遊 ぶが 其 名
を 傳ゟハ ぞなくずしも おとく 見 敬ねとも 其中に
家とあると 伐 志つれバ 其 名を 傳ゟりといふぞ
其 定り 此 二三 遣 ゟひ 法 志 ゟ 此 世 を のがれ ゟ

ありて。無常を思ひしてぞ。ぬにあらはれ。わきまるべし
後柔房云。後世をおりたんもれハ。志んごかめ二とも
けましき物とこそ云ひしてけん
柔軟房云。さはがぬ歳のする志あしぬハ。浄むもちく
決定往生志つ無き事ハ。思ひ志られてけ也。所雑
其実ハ往生をひぎしらんぬ。念仏ハ。引経坐外
を論ぜぬとなれバ。ぬぐ一仏なり。ねても覚くも。たち
ぬおきのしまを。なむあらぐ仏くとやてけそ。決定
往生のつくと思ひてけなり。学問も大切なる様ぬ

へども。さのこ往生の要なぬことをけいば。又学して一
のふ審を披といへどもそれなり志ながひて。おもぬ
ふ霧のこいできたるあひぐ。一段ハふ霧さばく
まゝて。公志げかに念仏まれるもなし。拙る念仏
のぬもりはなるぞ。中くたるさりてけ也
有云。後世をねがわぐ。世路をいとるむがおとしぬふを
でなり言ぬ。後世たげまざぬにやもしぬ。とくまも無こ
く閑ぬ一段いちがざれなり。過ぬ。よみ小はふして
なげくべしぬぐにくれぬるあと。暁ハさめて

111499

国立国会図書館　タイトル『一言芳談抄 : 2巻』 請求記号 188.64-I737　ガラス使用

思ふべし。ひめもすに行ぎむるを。懶怠乃時より
は。生死覺悟を思へ。惡念思惟の時よハ。終をあ
げて。怠仏すべし。鬼神魔縁あるをさそハ。惡
我をして。利益をあたへ。隆伏此せひをなほす
なりれ。契ハ業提のこねはしに仏道ありすゝむ留
無を掬也のきづな。我らに惡業をます
解脱と人云。一年三百六十日ハみれ無常にしさぶ
屋さ也。しりれバ。日数十二時ハしりなぐ。終焉此
きざみと思ふべし

明遍僧都云。無智ありた者
敬仙房云。一生はそぐ生をいとへ
西法と人云。怠仏家ハ業なきを業とする也
明禅法印云。生ぎ無ぎなること此屋も見也
求人敬日房に問云。稱名ハ性ぎの要と志りて。と
なへ。ゆへどもなりは整山此ことのこゝ思はれて。口がか
利に唱ぎばいかゞ。答云。法房ハこれへおもし
海さんといふ。云まて。立出あゆませ給ふあいさ。お
ゆむなしごとに。これへくとばかりありひ給ふる

国立国会図書館　タイトル『一言芳談抄 : 2巻』 請求記号 188.64-I737
ガラス使用

よしあらじ訪ふぬことは我も思ひてこそおもふ給
つゝぬされどもあゆむまゝ屋まずして。これまぞ
おもしろり。此定り極楽より性生をむといふ
穢をもしあ。極楽は名号をとる人給ふ日
ふはあらぬと我おぼしめすとも。稱名やま
ずして。能終まぞ切給ふ。性生決定するぞ
有云。鶯聖此宮河源陰佛の御座宮此志ろひ
のぞんぎあしげまそ。すこしう稱りしたらばよ
りなむと。御たくみありけり間。さやうしたらひ

なさんと。人々々れば屋くあるべしぞ。是又獻
離乃たよりなりよしと思ひて。無益
なりとおほせられきり
禪房云。取経淨去門乃大宮ハ。性生極楽を
屋まを起すと云ふさぞ。大なるやもしとも
はれば。ならば屋すらぬづきも。我を念仏の学
生此是誠まちくなはハ。堂教甚深なまバ邪
正まきまへがたし。但ふ人の邪まはざしの事
をなり矣

有云比叡の法社にいはんとりて。かんなぎ此まの
事なり。那よし如屋此ナ猿仰の法おのまて取うち
深さく。人しづまりて後。てのこうくと。法ごみを
うゆさく。ゑすゆしゝ法おうまて。どそとかくても
はなうくとこゝひゝり。まんを人かり志ゐ回れと
云。生死無常此ゐ指を思ふに。此世此ゐまハ。どそ
もかくてもはなう後世をさすけたまへとかなりこゝ
信澄屋云。寂林寺にも六時礼讃なと誦て。龍
ゆゑに人あつめまゐらせバ。即不換ゑ法にてゐへきも

播广上人。衣裳を思煩て。高聖を追出せ。大門の
急にて。扉此冬毛にりあひかりゝ法を見て。立
かりて住山云々
或人。時彩鄧綠此にしをきて。ぺ奥の絵あれ
事云。世をのがゝ法にりさゐ事をかゝりてそして
ぺすかなかゝ事をうりて。あれこゝ
敬白上人云。遁世に三此口傳あり。一には同宿。二に
其同伴なゝ法後世者とも此。虜をなくべゐる不可
不可住。三りは遁世をれバとて。日本此ゐ指

をあとくしも寄役云々
下津村燕河原伝云作たる屋ゝまきも堂山
此所藥堂の一樹など此樹なり人あれ堂川ハ
あしきなり
法然上人云尼公をハぬすまれ發るゝがゝ紀なり
親生屋云其昔明遍上人小あひそまつりて平
八道傳受の頃なり字輪觀可奉受なり不屋
の處に上人亦云學生知者なこのみ給ふ糠迦
佛此目位なりと學生なるまゝ海ぎ給ふ為

平傷投身為席捨家道心者まそこそ御しく
しが然ぞ深法ハ無用此るゝこ尼公ゝ大切なれ
是をきて後輪觀雖被許ゝ不可等閑志相僅
なりときゝ
親鸞屋云遁世とゝ下は稱林に行を引がおとく
捨なりかへられぬなり
同人上洛此時兄的屋修業屋お給ふ云ひし
此後世者の振舞と今此後世者の風情やゝ
なりて也昔の聖ごりの御法しあひそ行しき

ぞ人ハ娘世をなりゆんのあはりなきかれ神まで
こそけしが今は学問しいべき恵童などのあるを
娘世えのさまもあひてはやうく。敬仰庶ニ娘世
者れなりハ大にあらさはりにかはりにくそ
有ニ。乞食略りの次にハ。我雅名ゆゑを逝て。心ニ
にハ娘世れはとめをもし。終をも丸はべき徳不
使貞の始失などをかゝくよくく思ふし。みさ
ぎまめてとくづきも娘世れこゝ終なきりのハこれ
業がねまり也

敬仰庶ニ嫁す對治不淨無常ハ我次也只ん
貴為嚴御ニ。故ニ人ハあながちにうまへぞ。貴賤
をさ記とする故ニ。ぞれ娘世者ハ其分當有なは
がゆへよ。此事雖禁ニ。同ニ人あらさはりても
男女れ同事拘繕にしたがひ。同ニ人或同朋に
娘世先の寃竟の事をしつんとそ云。男ハ心ニ
なて。公そこそありなん。同ニ人ニ。ぞ度はかはな
をしたそまつはよ。日東の不なをかへるゆゑ也ぞ也れ
なもなりけり事ハ。揃がはしく思ひけるに。殘り

なれくと志仏をまたりハ。不如ゑく
或人物語云。諸家乃学すゝ法を持る法仏事
いまだ志しまらざる程。日他要事をお談を。一際
説の法時などまそ。一向後世門の事を。親密の法文
志しなぐら。お離の為めに学ぶ。白河説法時
なるハ。法文の法也。為相説法時りいたはまでハ
ぴとへに。世事のさたなり。則我おお仕乃時也。然るを
時まぞハ。編義日記ばかりなばをし也。当世ハ志程の
事をなきなる。資幢流本願ゑむし。此上人ハ一切

なる。此有無を法しき。次世の上人ハ法文をお
談を。当世の上人ハ。今義物語ゑく
明遍云。お家遁世の事ハ。尼のなとり。聖ぶ此所り
て死をむとも。得るなりしぞ。しとぬ。ひつまば
ぴりに云目ときまにあふとも。一志も人をうしむべ
うしぐ。こちにつけてと。仏力をあふくべきなり
解脱上人云。お離に三法あり。一ハ不持の愛物本
なる持経おまぞ。二りは分散を取しむ。三ハ善智
識の教に志さがはざ

国立国会図書館　タイトル『一言芳談抄 : 2巻』 請求記号 188.64-I737
ガラス使用

傳教紀文云。後世者此僧不ハ三間に不可過謂。一
間ハ持仏堂。一間ハ僧不。二間ハ世事不也
教性屋云。我ハ迎世此始まりてぞく死ぬやと
云事をかしかりされば。三十餘年間ぬらひ
故にとは。所時も忘れば。ぞく死ぬければ。すまりも
近さり猶なれば。むすぶつぶれてぞひしきやされば
云。尋義一も。よくそりたむとするものをハ制されば
生死を厭すなぞ。たすすとありはざらんや云々
かゝる者教法ハ死にハ恒もをば。極楽と中をあまあハ

せと。本尊とも安ぜば。聖教なとも持をず。僧にも
あらば。俗にもあらぬ形にして。法にも不無に向て。念仏
して其餘ハ忘れ法がむとしこそ
法然上人云。念佛の義と深く云事ハ還る法事と
義ハ少しくしども。所求ざるも深ハ一定往生ハ志そん
又云稱名念仏ハ猶なきを持とは。身此振舞。心の
善惡をも沙汰をす。念此に申せば。往生を法なり
聖光上人学問をふ更して云。日来学しまつ法。人く
ざるも。捨て。云念仏をハ申されなきざりしよ

いと海より。志仏をは申さずして。学問をも申し無
意也。念佛を申していと海此ひさしにハ。さもありなん
下津村無河源信仏云。行基曰。老也。他佛自莫為
いとゝ。人此まさに入るが。云此聞きにまはりあるなり
或人問法を誡云。拘なりしかりあひて。彼ハ聞すく
て。換がたすなりしゝ
恐河源信仏和漢の文字。みなりて三和の河片仮
用ゐしゝ
敬菩薩社云。いつに發とも。行業がどもバ二重三重ひさ

さけて可行也。今をばうかそ申しして。行業をしたれ
りなれ。無事也
敬仏房云。同朋を呵して云。とのれハ為鏡灰此足寺
めんぞなりの也
同上人家後の前労此時云。[illegible]僧那法房乃佛
肋のへと。無邪ハ無ありあらはしらしたるも聞ひ
しが今こそなりひ志しぎれ。永澤親も。平生の時此
あと也。東城寺此阿耨房。式此法文を知ハ猿楽を
まなまそこうあれと云けるも。ひとそ思知ゝゝ

ん飛上人。空国修行のあひだ。或百姓の家の袈に手
付て云。念仏者なりぞ。念仏申て。性生をこそべし。
行仏尾云。或人問云。我力の無為仏をとりアルて。性生
をこし。母よ涯分を不顧。決定性生と思と。何がよく
はべ哉。答云。我もしし少差入道に謁こりさ性生ハ家
弟の一念より決定をり。報教盡ざれバ。依身の未清
ばかり也と。申されしが。妹縁の性生をどけ事哉
然答入道也。此定に彼申けるとのん形りさ
孫勝房又生あれりの。必死すがあとく。性生ハを

さそハ決定也と彼申けるが妹縁の性生をこげれ
たり。此あ三人ハ同上人面授の人くにて。彼古教訓也
然ぞ。決定性生の思ひを可成也 此意ハ三人同行仏上人者也
往西の奉先尾明遍に奉問云。若敬湯をバ。ゑ時の
稱名答ハあらぬ。云を志づかにして。のち可唱也と申
けるぞ。いかで用ゑ。答云。そこそ上様にそそらん
我何弥陀仏がどもきの上様ハ云を志げむ事を
いかにとなのひがたかれぞ。此様の結を体よくして
乱不乱を不論。こりあそこそ云へ云の志づまらん時と

思ひんまは堅固念仏しさぬものいくこそゆたんきれ
法然上人つねの法門ゆえ衣と食とを貴をゞやかれ
同乗新屋しさくに上人ごとにも精に不定げ物れ
作此ゆたんにんましてそのよ此人をいくじゆ衣とを
時上人たちわらひてのおりく蓮屋にのらんまぞ
無いぞかは思ひをそしゆべきそと
又云あれ阿波介が念仏も深穴が念仏も浦くく
りて同念仏に助かへあらん仏無ふ所はなし此念
を發ざるなり也

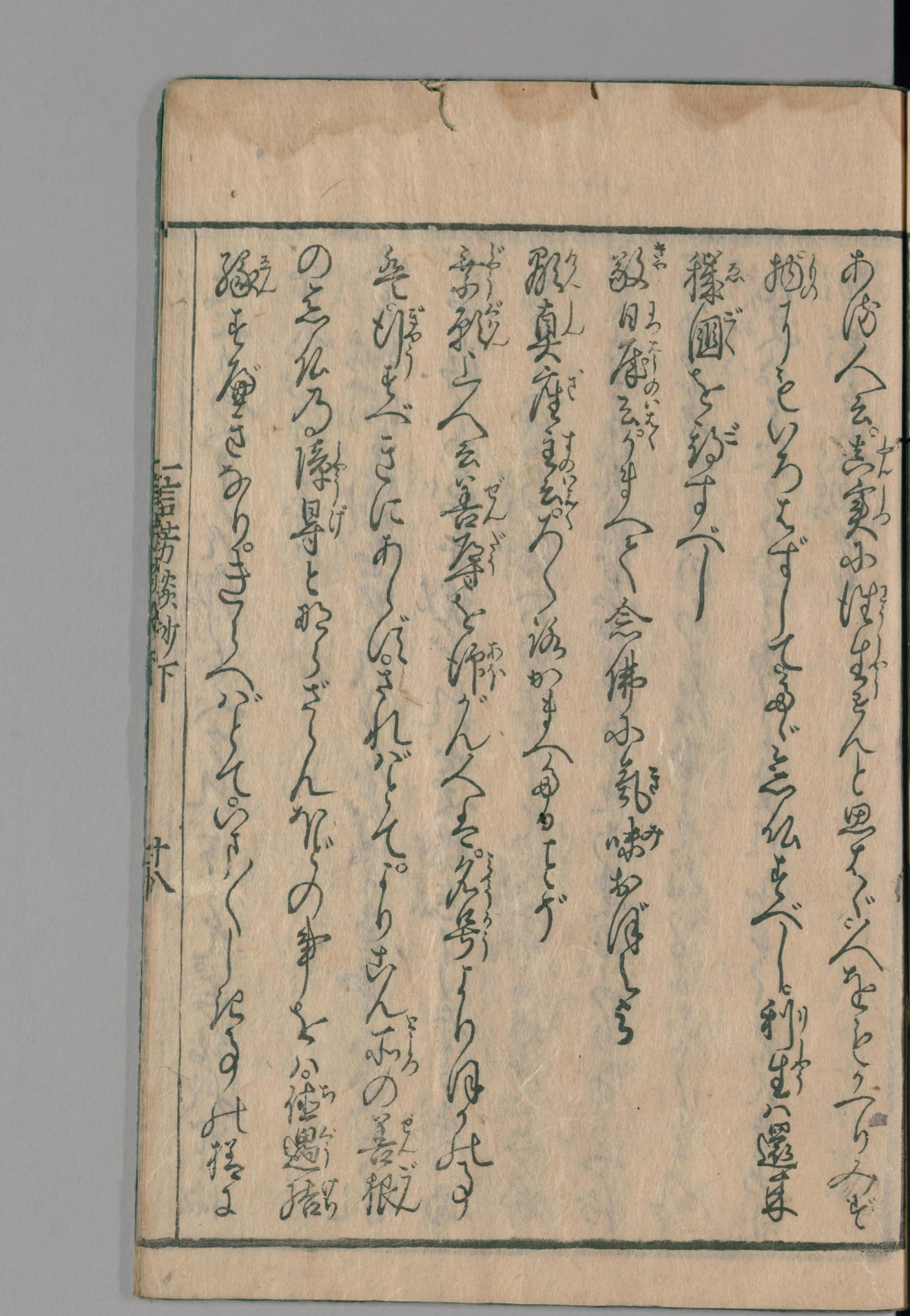
又云ナ彦一夢あれ入ぞ念仏を法ぎれ精念
不接若あそ念佛をぎぎ法精なり
或人ゆ遍に同云学問ゆなど暫念仏の教反を減
ゆたんと答云学問ゆ念仏を修ともがためなりかし
教反を減らぬべきは教えをまつれべきなり
聖光上人云毎河は助かへ河法法仏と云ても思
ひ口にもいふなり又云故上人此ゆ性ものこめ
り念仏を申時念仏の行ん大事にあげしく
行ぎ法に付て勇ありて法は念仏乃申た 是

せば。我身にすぞに。三公をぎせりとおりしべきなり
信覺上人問云。智惠りしはまれ要ならべくは。正
惠りし仰をうしむまて。修學をいとまむべし。又さて
稱名ふ足なくそ。ぞれむまを。ぞべくはいふ。答云。往
まれ業を。是稱名といふ事。只此文字的也。有智
無智を不簡ないとぞ。又此形狀なり。然ぞ為往生
稱名ゐ足。学問を好とをむより。公向ふ。志仏すべ
し。徐徐觀音勢至。生蓮の時。何此法文を達せさ
らん。志仏往生此旨を志らばらんかどは可学べく

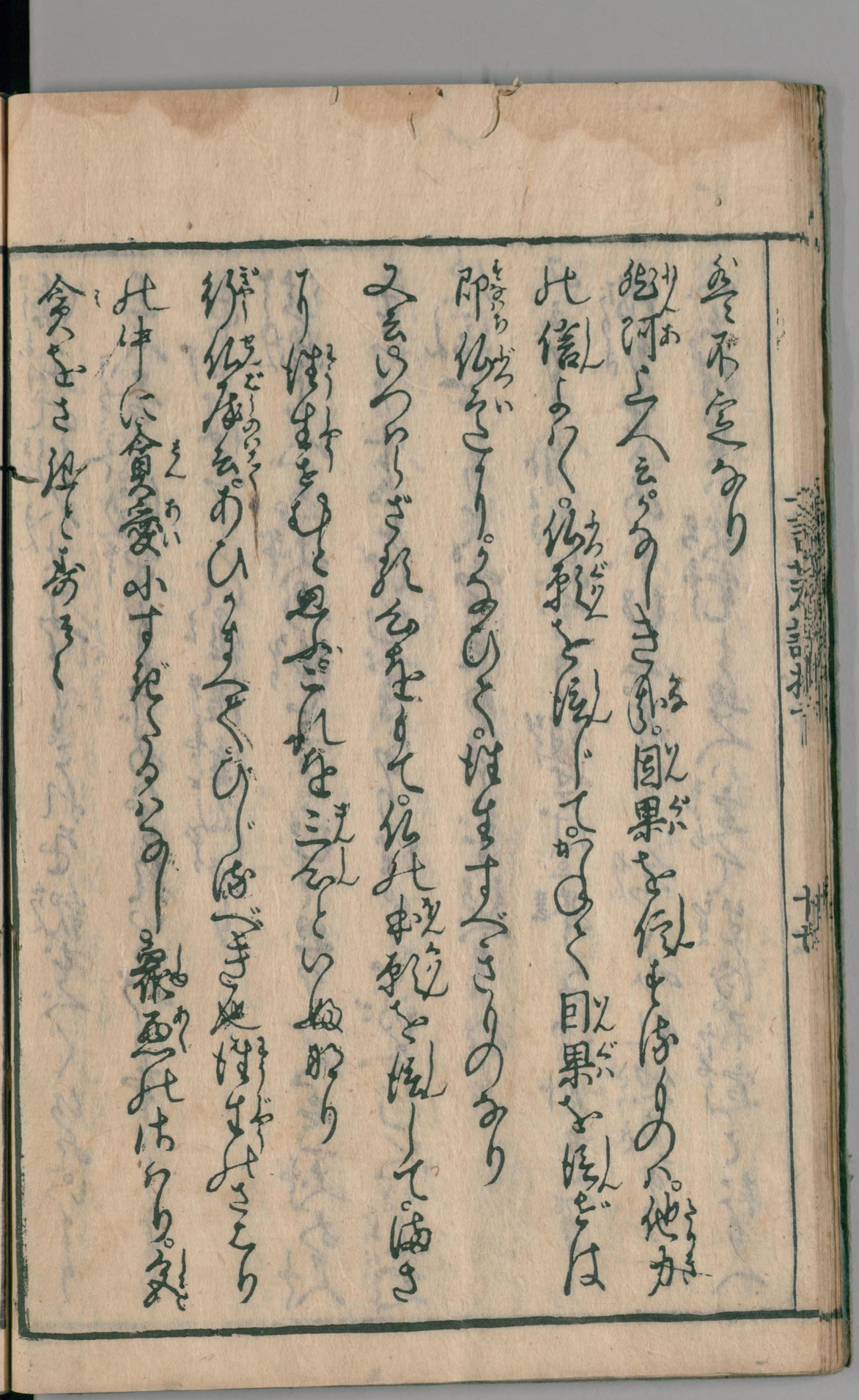
ぞしこれを云をいりなばいくばくならざば。智慧を
をとめて。稱名の勝をはまらぐべしは
然阿上人云。三公をぎせざばりのとおして決定往
生と思へぞ。ぞれ故實によりて。はじめて三公をぎす
又云。凡淨土宗のえさ。ぞすはれへあみ。ぞれと思ふ
りすさは
聖光上人云。凡夫公磨緣對境の名利を。斗數也
但往生此解行につきて公向志實なるべし
法然上人は往生の後。三井寺此行云屋小夏此中

にそれても。おもてハ仏を渇仰する風情なるべし
よかりとぞ人おもひさとり
観阿上人云、別時すゞハ、あとにて六時礼讃の後に
ことに念仏を修さむ時ハ、別時に用心して、更に念仏の
思ハ、修すべしと。聞上人云、修せむ上人ハ、陀羅尼の哀(?)
なかれ、時はきこれか、何も一丈一寸とも、顕しきよく。
念仏をあみ、経をよみ、礼讃念仏を行じ勤めく
きかずの聖衆も、ありがたしとおぼしめす礼讃とゝしき
称名上人云。念仏人ハ、向云。南無阿弥陀仏の経の観を、念仏ハ観経の説なり、さうい

称名の行人とハいへども、これを観ずべくハ、それにかなり
上人答云、深宅もあしめハ、それいらぬ事しかなり
きことハ、無ろしめ、但信称名なり
法然上人云、むかしの聖も、思ふ人をこゝろざしあるべし
なまじひにとゞけむべきなり。往生を願はむ人ハ、決定
の心をとりて、念仏をはげむべき事なり
又云、自力の心にて行ぜば、三業の紙(?)自力也
他力をたのみまいらせて、念じまいらすれば他力なり
又云。往生ハ決定と思へハ定て往生す。不定と思へハ不定なりけり



無不定なり
絶河上人云。なりきれ。因果を信ずるものハ。他力
此信よりて。仏願を信じて。かゝりて。因果を信ずるは
即仏をさまり。うまひて。往生すべきものなり
又云。いつからざれ云をもて。仏此本願を信じて。満き
り往生をむと思ふこれを三云といふ如なり
往仏屋云。おひまへてひじ。なべき此往生のさまり
此中に貪愛小すべきなるなり。衆悪此はなり。気
食をさ往とおもふ



あ法人云。其実に往生をんと思ふべきなりみぞ
摘りもいろもずしてゐぐ志仏をべし。利生ハ還来
穢国を移すべし
敬日屋云。かまへて念佛に気味おぼしたる
聖真座主云。ろく法かまへ申とぞ
柔和上人云。善尊を師がんへ。名号より得ん此す
無師をべきにあらざれバとて。ぞりさん不の善根
の志仏乃陳昇とおらざらんなどの事をハ仕遇括
縁を無きなりぎしへバとて。いまくし給す此様に

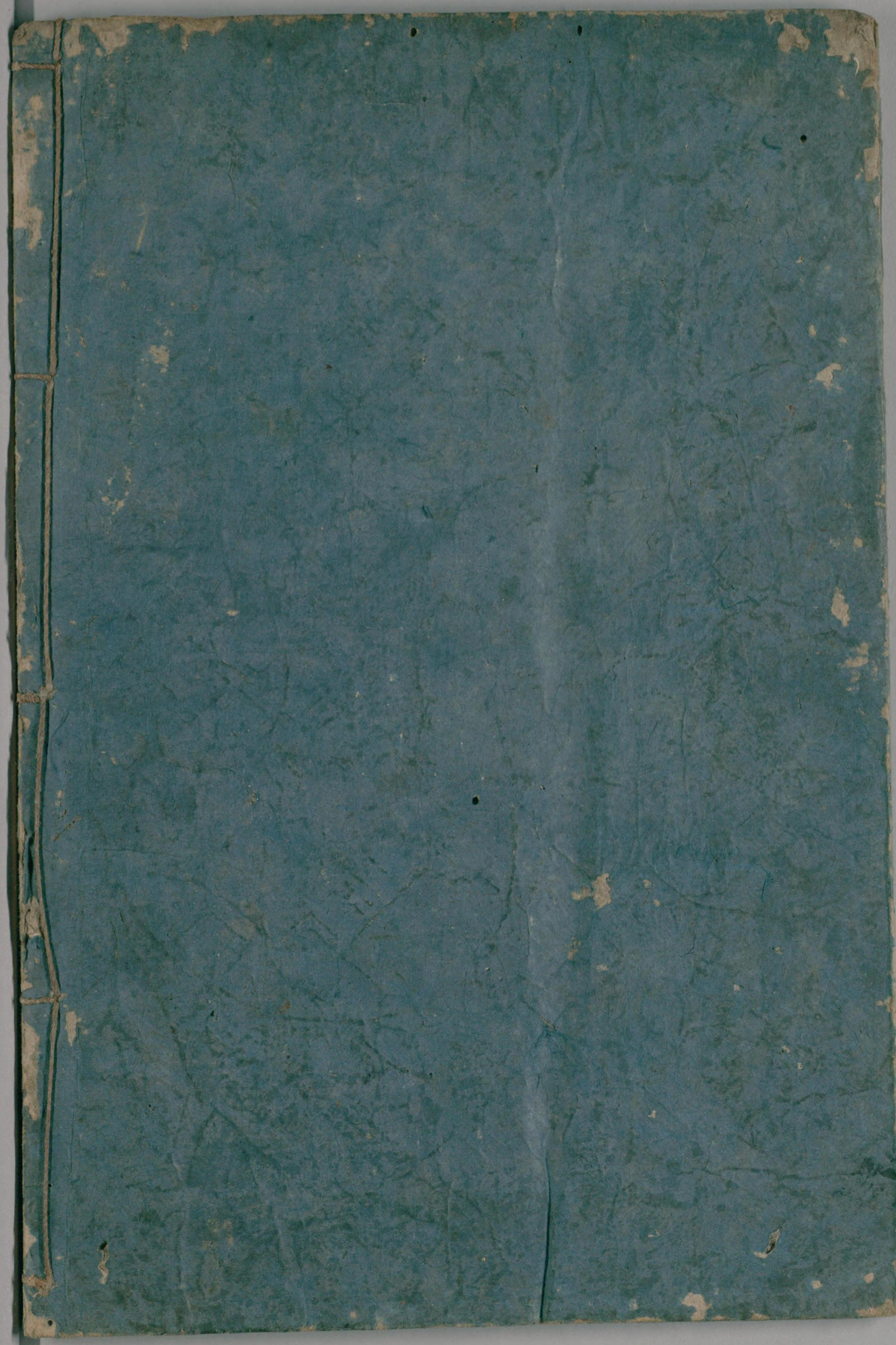
おらまほしきものどもねがひあひきりけれは
或云 椎尾ゆうたう法門をさ後世物語をしよ人感
云いみじ見ねがへりけれ髄を見そ事ごとれり
しく奄うらぶ
首いとく遁世といふは常りく人をいとふべからぬ但
ゆへなくぺをたうしゆくひかいんなりいまいとふゆへ
無ゆく名利をいとふゆへなり掃又尻まの如
人を揭身にして雖治れなりいとく名利
をりよりさぬ同時一毒人あひうまへそしむ

僧房を無きもおりをならばかくし雖
れべきなり

依補定所望雖去早速弛筆
于時寛正第四載孟夏上絃之比

一言芳談巻之下終

慶安元年林甚右衛門刊



国立国会図書館　　タイトル『一言芳談抄 ： 2巻』　請求記号 188.64-I737

ガラス使用